出逢(デア)えなかった命

糸満高等学校　三年
徳村　玲美

独立した空間で
重く冷たい空気を
わたしは吸う
視界を埋める現実に
吐いた息は震えていた
わたしを楽にする呼吸が
とても苦しい

怖かった
力なくぶらつく
女性のほそい腕を見た
見慣れたこの地が
赤く熱く焼けたあの頃

やさしい景色をころして
みんなして平和を
謳(ウタ)っていたんだ
写真を通して見た過去
真実は苦い

言うがまま犠牲(ギセイ)になった
人　自然　人　世界
歯向かうことも
抗(アラガ)うことも許されず
世界を覆(オオ)った黒
頭痛　目眩　吐き気
きこえない「助けて」の声が
鼓膜を叩く

必死に生きようとしていた
出逢(デア)えたはずの命
ころしたのは　み
んなで合唱した
「正しさ」

誰もが夢中になっていた
　命を見捨てるほど
白黒つけることに拘(コダワ)って

こたえを探した
「間違っているのは」
勝敗は関係ない
間違っていたのは
血眼(チマナコ)になって求めたもの
下(クダ)した判断

この地で戦火となり散った
彼は　きっと最期(サイゴ)に
あの人の名前
呼びたかったのでしょう

血が流れ見えなくなっても
こびりついたまま 骨が溶け
消えてしまっても
染み込んだまま 肉が裂け腐
敗してしまっても
　後に残ったまま
　今も忘れずに覚えている
時代は
あの人は

罪は毒
時を経て
主張されている白を
真っ向うから否定しよう
写真の向こうの悲劇
繰り返さぬように

並ぶ顔写真
同じ年くらいの若い
優しい笑みが
　しわしわになって
出逢(デア)いたかった